

大学院授業「日本人論と日本事情」におけるアイデンティティ概念

河野理恵

要旨

講義科目名「総合社会科学日本事情」（講義題目「日本人論と日本事情」という大学院の授業で、初めて日本人学生2名（うち1人はハーフ／ダブル）を受け入れた。そのため従来とは違った討論内容となり、授業後のレポートすべてに「アイデンティティ」ということばが出現した。本稿では、授業の中での日本人学生の発言が与えた影響、日本人論と「アイデンティティ」概念の関係などについて考察し、留学生に日本人論を教える際の留意点をしめす。

キーワード：アイデンティティ ハーフ（ダブル） 日本人論 日本事情 ステレオタイプ

0 はじめに

筆者は2000年から2005年までの5年間、大学院社会学研究科の「総合社会科学日本事情」という講義科目で「日本人論」を取り上げてきた。この授業は、修士課程や大学院レベル研究生の留学生を対象とし、さまざまな「日本人論」や「日本文化論」を取り上げ、それらを留学生が自分の身のまわりの日常レベルから再検証したり批判的に考察したりして、自分なりの「日本人論」を考えてもらうことを目的としている。日本人学生の参加を断ってきた理由は、日本人学生を入れると、留学生の発言が少なくなったり、留学生がもついわゆる「日本人ステレオタイプ」を再確認ないし強化してしまったりするのでは、と懸念していたからである。

だが今回（2005年度）、修士1年の日本国籍の男子学生A（ハーフ／ダブル）とその友人の日本人女子学生Bが参加希望の強い意向を示したため、筆者は単位なしの聴講生という形でふたりを受け入れることにした。懸念はあったものの、試験的に日本人学生を参加させることは今後の授業のあり方を考える際、参考になるかもしれないと思ったからである。

この授業の参加者は、台湾人学生C（男）、D（女）、韓国人学生E（男）、F（女）、そして日本人学生A、B、の6名であった。

授業のシラバスは以下のとおりである。まず、はじめに「今、現在頭に浮かぶ日本人論、日本文化論についての考えを書いてください」という課題で各自からレポートを提出させた。そして各週、受講者に順次レポーターとコメンテーターを分担させた。今回はレポートを極力短くし、ディスカッションに多くの時間をさいた。

第1週目 ルース・ベネディクト『定訳 菊と刀 日本文化の型』（長谷川松治訳、1997年改版、社会思想社、原著は1946年、最初の邦訳は1948年）、第5章と第10章。

- 第2週目** 中根千枝『タテ社会の人間関係』(講談社現代新書、1967年)、第2章と第3章。
第3週目 土居健郎『「甘え」の構造』(1971年、弘文堂)、第2章。
第4週目 杉本良夫、ロス・マオア『日本人論の方程式』(ちくま学芸文庫、1995年)、第3章と第4章。
第5週目 同『日本人論の方程式』、第5章と第6章。
第6週目 同『日本人論の方程式』、第7章と第9章。
第7週目 同『日本人論の方程式』、第12章、ハルミ・ベフ『イデオロギーとしての日本文化論(増補新版)』(1997年、思想の科学社)、「日本文化論は大衆消費財」、54-67p。
第8週目 青木保『「日本文化論」の変容』(1990年、中央公論社)、第3章と第4章。
第9週目 同『「日本文化論」の変容』、第5章。
第10週目 同『「日本文化論」の変容』、第6章。
第11週目 杉本良夫、ロス・マオア『日本人論の方程式』、第15章。
第12週目 吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』(1997年、名古屋大学出版会)、第7章。全体討論。
第13週目 全体討論。

そして最後に、課題「私と日本人論」について各自からレポートを提出させた。

筆者のこの授業のような、知識のみを与えていくタイプの日本事情の授業を細川(2002)は厳しく批判している。しかし、知識を鵜呑みにする弊害は乗り越えられることを筆者(2005)は検証した。実際、今までこの授業の受講者の最終レポートには、「ステレオタイプを鵜呑みにしてはいけない」、「知識社会的な日本人論考察の重要性」といった記述が目立った。つまり、知識を与えることで既成の先入観を植えつけるとは限らず、知識群の構成によっては、むしろ知識で先入観を打破することも可能だといえるのである。

しかし、今回の授業の最終レポートでは、今までとは違ってすべての学生のレポートの中に「アイデンティティ」ということばが入っており、「アイデンティティ」を鍵概念にまとめられている。しかも受講前のレポートには「アイデンティティ」ということばは一切含まれていなかった。このことは何を意味するのだろうか。

1 学習者のレポート

まず、最初に受講生の最終レポート『私と日本人論』の中で「アイデンティティ」という用語がある部分を抜粋する(「アイデンティティ」には筆者が直線の下線を引いた。波線部分は、のちに言及する「日本人の定義の曖昧性」を指摘している部分である)。レポートには日本語として不十分な部分もあるが、ほぼ原文のままにした。

学習者 A

現代はグローバリゼーションの時代と言われている。国境を越える資本や人の移動、情報の浸透は、国民国家の枠組みを基盤としていた社会システムを変容させ、国民国家に根ざすことが当然視されていたナショナル・アイデンティティにも亀裂や揺らぎ、対立などを生じさせる（国広、2004）。船曳によれば「日本人論」が生まれる背景には、日本社会がなんらかの「不安」を感じているときである。先行きが見えずに「不安」な時代において「日本人論」は必要とされているのだろう。

学習者 B

一方で、世界の舞台で活躍できる日本人として、欧米流のやり方を積極的に会社経営に取り入れる動きや、熱心な英語教育の普及が目立つ。ここでは、「日本人」という枠は存在しない。というよりは、一つの物差しで彼らを測ることは不可能である。もう一方では、世界における「日本」の存在意義を再確認するために、日本の由々しき伝統文化を若年層に浸透させる活動や、「日本人としてのアイデンティティ」といった言葉が広がりを見せている。

学習者 C

直感的に言えば、日本人は日本人だと言うまでもない。別に疑問なさそうだろう。しかし、授業でのハーフ日本人が仰っていた自分経験を聞いたことをきっかけに、在日台湾人の友達と子供について、話したり、観察したりして、深く考えると、実はいろいろな面相がありそう。（中略）要するに、かつて日本の植民地としての台湾は否応なしに日本的な特質が残った。戦後 60 年の発展に伴って、日本から、アメリカから、多様な影響を受けていながら、台湾人自分のアイデンティティを立て来た。私は台湾人論を次のように考えている。それは、将来の政治問題は別として、他の国や文化と交流し続けて、オープンされている社会の枠を作ることは今後の要務になっているのではないか。

学習者 D

「ウチ者」と「ヨソ者」の観念も強くて、自分と同じ所属ではなければ、他人行儀をしたり、無視したり、排除したりする。同質同調論で言ったように、日本社会は一種の閉鎖性を持っていて、外国人を排斥する。しかし、ここでは、外国人だけではなく、同じ日本人でも、「ヨソ者」と扱いされたら、グループに排斥される。一番分かりやすい例は授業中でもよく取り上げている「ハーフ」の所属なのである。流れている血は半分日本血統だし、日本籍も持っているのに、日本人と扱いされていない。また、親の都合で、海外で長く生活していた帰国子女も同じ問題を抱え、日本人というアイデンティティを

どういふ風に受け止めたほうがいいのか戸惑っている人が少なくない。そして、数十年前、政府の政策に騙されてブラジルに移民した日本人たちも、日本人として認めてもらえない。一体どういふ条件を持っていれば、日本人というカテゴリーに入れるだろう？とても難しいと感じた。（自分も同じ問題を抱えている。台湾で生まれ育った私は、自分が台湾人だと思っている。しかし、両親は戦後から移民してきたので、未だに台湾人と認めてもらえない。不思議なのは、私が台湾にいる時は外省人と呼ばれているけど、海外に行くと台湾人と呼ばれている。つまり、台湾にいる時、私は「ヨソ者」、海外にいる時、私は「ウチ者」のわけだ。）

学習者 E

明治維新以後、近代化の過程の中で日本は絶えず自分のアイデンティティの確保に努めた。近代化を目指して欧米のようになるために努力したが、欧米のものを移植できない所があり、これを埋めざるを得なかったのである。特に宗教、思想がそうであった。日本人論はこうした状況の中での日本人のアイデンティティの確認であり、これは戦後の経済成長のときにも当てはまる。それではなぜ韓国論、中国論のようなほかのアジア諸国より日本人論が盛んになっているのか。この理由は、日本が欧米を目指した近代化の選抜国家であるからである。

明治維新のときも、戦後経済成長のときも、日本は非欧米の中で近代化されたほぼ唯一の国と見なされてきた。そのため、日本人は伝統の文化に欧米の文化を移植しなければならなかった。欧米の植民地になった前、各国で近代化の試みが行われたが、ほとんど挫折で終わったので日本は、成功した例から伝統文化と欧米化の調和について学べなかったのである。そのような理由で日本は絶えず、自分のアイデンティティについて振り返ってきたと考えられる。このようなアイデンティティの確認として日本人論は盛んになったのである。

学習者 F

最近の韓国では、日本と韓国が、東アジアという同じ枠のなかに存在するため、似ている文化であるという認識を超え、日本文化を見下す意識まで出ている。こういった状況の改善を図るためには、お互いが過去をちゃんと認め、アイデンティティの確立につなげる努力や姿勢が必要であると考えられる。時代の変化とともに日本人の思考様式がどのように変わっていったのか、なぜこういった日本文化が定着したのか、また韓国との親善を、客観性を失った色眼鏡で見るといふような行為は、これからのグローバル社会には通用しない。今後は「近いけど遠い国」ではなく、「兄弟国」になれるように国民の皆が努力を重ねていかなければならない。今後も日本と韓国の文化を研究・分析する努力を拡大していき、微妙な文化心理的相違点と共通点を明らかにすることを試みることで、

両文化への心理的な理解がより深まると思っている。これは同時に文化の差異に基づいた、より広く深い知識の構築にも役立つであろう。

このように、どの学習者も「アイデンティティ」をナショナルなレベルで、国とか国家とか国民とむすびついた概念としてとらえている。学習者 C は台湾人のアイデンティティを語っているが、これはこの学習者が日本人論を手本にして台湾人論を模索しようという問題意識をもっているからである。学習者 F は日本と韓国の「文化的心理的相違点と共通点」という文脈でこのことばを使っている。他の 4 人はみな、このことばを日本人が自己を確認するものとして日本人論がある、という文脈で使っている。

最終レポートに出てくるもうひとつの重要なトピックスは、「日本人の定義の曖昧性」という点である。たとえば、学習者 C は上の引用部分の波線以外につきのように書いている。

区別の基準として、国籍や民族や言語などの簡単な目安を取ってもいいが、実はそうではない。例えば、友達の台湾人が日本で、旅行会社を経営して、28 年日本に滞在していて、日本の永住権も持っている。日本に生まれた 13 歳の息子は日本式教育を受け [て] いる。この子供は自分を日本人として、かえって、両親を外国人と思っている。その人は国籍を別として、言語や価値観など様々な方面を見ると、まるで日本人に違いない。[改行] ここで、日本人論の客体としての「日本人」というのは実体ではなく、あいまいな概念的な意味を持つものに他ならない。それは論理的に言えば、内包と外延が決まっていない矛盾である。それは、答えない方程式だと結論付けた論者の考え方の由来かもしれない（杉本ほか、320 頁）。解決するのは、もともとの日本人の概念が狭いので、もっと拡大しなければならない方策である。

また、学習者 D の上の引用の波線部分が「日本人の定義の曖昧性」にあたる。

2 考察

まず、今回の最終レポートに「アイデンティティ」が出現し、「日本人の定義の曖昧性」の指摘も複数あったのは、学習者 A の存在と、彼の発言の影響が大きかったといえる。日本出身の学習者 A は（父：日本人、母：ドイツ人）であるが、他の学習者も国籍を越えた多様なアイデンティティを持っている。台湾出身の学習者 C は（父：本省人、母：本省人）、同じく台湾出身の学習者 D は（父：外省人、母：外省人）、学習者 F は（父：韓国人、母：韓国人）幼少期を日本で過ごした韓国の帰国子女である。

授業におけるディスカッションでは、以下のような意見が出された。

- ・国籍とアイデンティティが、絶えず結びついているのはおかしい。（学習者 A）

- ・最近「ハーフ」という言葉が差別語になってきているが、「ハーフ」を「ダブル」と言い換える必要性はない。「ダブル」はエリートが使いたがる概念で対象をせばめている。「ダブル」といわれている人は別に「ハーフ」でいいと思っている。(学習者 A)
- ・日本人らしさとは何だろう? (学習者 B)
- ・アイデンティティは一つなのか。グレーゾーンを認めようとしめない。(学習者 A)
- ・日本にいる無国籍の人は日本人じゃないの? (学習者 A)
- ・知人の台湾人の子どもは日本だけで育っているのに日本人ではない。(学習者 C)
- ・韓国人の血が流れている日本の歌手や有名人(韓国語が全くわからない人)は韓国でも人気がある。(学習者 F)
- ・地方出身だが、親とは標準語で話し、友達とは方言で話していた。それは、周りの友達とは違っていた。(学習者 B)
- ・姉は見かけは日本人に近いが、ドイツ語習得に熱心で、自分は見かけはドイツ人に近いが、日本人だと思っている。(学習者 A)
- ・学習者 C とは同じ台湾出身で親しみは感じるが、絶対政治の話はできない。(学習者 D)
(これについては学習者 C も同じ見解)

「アイデンティティ」という概念についてここで本格的に論ずることはできないが、この概念が国家や国籍とのつながりだけをもつのではなく、何種類かの意味をもち多様な使われ方をしていることには注意したい。たとえば、便宜的に「個人的(ないし自己)アイデンティティ」と「社会的(ないし集合的)アイデンティティ」に分けることがしばしばおこなわれるが、前者では差異性(ユニークさ)が、後者では類似性(共有性)が強調される(Jenkins、1996、pp. 19-20)。学習者たちが最終レポートで一様に言及しているのは、アイデンティティ概念の種類としては、個人としての「自己アイデンティティ」ではなく、日本人あるいは台湾人・韓国人としての「集合的アイデンティティ」の方であった。

また、原(1995、pp. 7-8)はアイデンティティということばの意味合いを、Self (Ego) Identity、Social Identity(職業やさまざまな社会的集団や家族、学校、企業などの組織、さまざまな役割、国民、言語、宗教、民族、文化などのアイデンティティを含む)、Existential Identity、Biological Identity(人種、性別、その他身体的特徴の共通性に基づく一体感)に分けつつ、他方、「すべてのアイデンティティは、自己の構造として位置づけられて理解されるべきである。というよりも、あらゆるアイデンティティは、自己アイデンティティの構造のなかにしか存在しないのである。したがって、たとえば、パーソナル(個人的)なアイデンティティとソーシャル(社会的)なアイデンティティの二つに分けたり、あるいは、心理的アイデンティティ、生物学的アイデンティティ、社会的アイデンティティ、実存的アイデンティティなどに分けて、それぞれを並列的に扱ったり独立して存在すると考えたりするのは、間違いである。[中略]自己アイデンティティに統合化され、構造化されて初めてアイデンティ

ティとしての意味をもつのである」としている。つまり、自己アイデンティティは、自己意識を核にしなが、その自己がさまざまな社会的、実存的、生物学的アイデンティティを形成して、自己アイデンティティを中心に据えつつ大小の多数の楕円が重なり合っているような図として理解できる。その形や大きさの全体はみな個性的で、一人ひとり異なっている。たとえ一卵性双生児であっても、そのアイデンティティの中身は異なっているのである。

このようなアイデンティティ概念の要点をベースにして今回の授業経過を分析すると、次のようなことがいえるだろう。

まず、学習者たちが最終レポートで言及した集会的アイデンティティの一部である〇〇人アイデンティティは、アイデンティティ概念の多様な意味合いのごく一部であるにすぎない点には留意を要する。国籍や帰属民族以外に、職業、さまざまな役割、組織・集団や、生物学的な諸項目など、じつに多様なことがらがアイデンティティの内容に関係してくるのである。さらにいえば、同じ国籍、同じ職業、同じ会社の人間が同じアイデンティティを持つとは限らない。その国籍、職業、会社に対する考えや態度がひとりひとり異なるのである。また、ハーフである学習者Aの発言をきっかけにして、日本人あるいは台湾人の、定義、範囲、境界線の曖昧さが話題になった。ミードのIとmeの概念や、「レッテル貼り」に見て取れるように、アイデンティティは、自己による内的な規定と、他者による外部からの規定との力動的な関係によって構成されており、それ自体社会的なものである。それはまた一義的に決まるものではなく、演技の余地を残し、またどういう戦略を個人が採用するかによって違ってくるもので、時間と空間の広がりやなかで多様に変動し発展するものである。

ここでいう「他者」「外部」というものも、実際的な相互接触の場面場面でその意味合いが異なってくる。例えば、台湾人としてひとくくりにすることもできるし、本省人である「私」と外省人である「他者」として分けることもできる。留学生たちにとって、日本人論の学習は、一面では「他者としての日本人」の理解という意味をもつ。しかし、他面では、本国にいる友人などからすれば留学生は日本に住み、日本語を話せ、日本滞在のさまざまな経験を通して変容しており、もはや以前のそのままの台湾人（あるいは韓国人他）ではないともいえる。また、学習者Cは「日本がアジアの一番先進国として、成功の秘密がどこ [どこ] にあるかを自国の参考にするつもり」と最初のレポートで受講動機を説明しているが、欧米人であればこのようなスタンスは出てこないかも知れない。

日本人論や日本文化論を学ぶという今回の授業のような文脈で、受講生全員が留学生である場合には、日本人が書いたものであれば外国人が書いたものであれば、日本人について書かれたテキストの内容と自分自身の具体的な日本人に関する経験とが対比される。そこでは、日本人論や日本文化論は、他者である日本人の「特質」を語ったり、その語り方を批判していた。したがって留学生たちが自分たち韓国人や台湾人などなどの集会的アイデンティティや特質について言及したり、さらに自己アイデンティティについて考えたりすることは、テキストで日本人について語られていることをもとに自分たちはどうだろうかと考えてみるとい

う回りくどい回路を必要とする。話題の中心は、留学生たちにとって他者である日本人論だからである。

ところが、日本人学生が加わると、日本人論は、その日本人学生にとっての自己の帰属する集団の集合的アイデンティティ、あるいは個人としての自己アイデンティティの問題としても語られるという、留学生だけの時とは異なる意味合いをはらんでくる。さらに今回の場合のように、ハーフ/ダブルとして通常の日本人/外国人という二項対立的な区分を超えている学習者Aが参加し、境界線がそれほど白黒二値的な明確なものではなく、かなりの幅のあるグレーゾーンがあることを指摘し、また、個人としての自己アイデンティティを語ったことが大きな刺激となって、留学生たちも自分たちのナショナルな、あるいは民族的な集合的アイデンティティについて、多様な様相があることに気づき始めたといえよう。

このようなアイデンティティの微妙さと多様性に気づきつつ、他方では、日本人論の学習が中心だったからなのか、ナショナルなアイデンティティにかなり引きずられているようなところが、最終レポートには見受けられる。アイデンティティは国家（地域）、国籍のものだけではなく多様なものである。グレーゾーンや境界線は結構幅が広い。今までは単に、多元的なものを国家（地域）や民族で一元化しようとしてきただけなのだ。

箕浦（1995）は、江戸時代には、日本人というアイデンティティはなかったことを考えれば、日本人のアイデンティティそのものが近代の産物であることが理解できる、また国際化が進み文化間移動が一般化すればするほど、一文化、一集団に自己のアイデンティティの拠り所を求める人より、「超文化的アイデンティティ」あるいは「多文化アイデンティティ」に生きる人が増えてくると予想される、と述べている。箕浦は江戸時代には、日本人というアイデンティティはなかったというが、実際は「何々藩の者である」とか「何々村の者だ」というように、人々はアイデンティティを認識していたであろう。そして、今現在、箕浦が予想したように、大学の授業に出席する学生の中には、帰国子女、ダブル/ハーフ、韓国系中国人、モンゴル系中国人など、さまざまな超文化的学生が数多くいる。

今回、学習者Aが授業に参加することによって、授業が活性化し、別の日本人学生、留学生にとってよい経験になったと思う。授業をデザインするにあたっては一元化圧力を弱め、多元化・個人化を促進することが重要であり、そのためにはひとりひとりの受講生の自己アイデンティティの独自性と多面性の具体的な内容に目を向けさせることが大事である。授業時間における日本人論の学習を1回減らし、アイデンティティ概念自体についての学習に切り替えることも考えられると思われる。

参考文献

河野理恵（2005）「日本人論を扱った『日本事情』の認識論的考察」『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク pp. 209-221

原裕□ (1995) 「異文化接触とアイデンティティ」『異文化間教育』9号 アカデミア出版会
pp. 4-18

細川英雄 (2002) 『日本語教育は何をめざすかー言語文化活動の理論と実践ー』明石書店

Jenkins, Richard (1996), *Social Identity*, Routledge.

箕浦康子 (1995) 「異文化接触の下でのアイデンティティ」『異文化間教育』9号 アカデミ
ア出版会 pp. 19-36